

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.16

姫様が節分に撒いた煎り豆を見つけては食しておりましたが、それも最近ほとんど見当たらなくなりましたな。



それもそのはずでござる、気が付けば暦は早や3月となり女川（浅ノ川）には雪解けの冷たい水に鮮やかな友禅流しが幾重にも踊っております。

梅の橋から右岸の観音町へと耳を傾けますれば、小気味よい三味線の音色にまじって時折響くお師匠さんの厳しい声が、向山からおり来りて吾がほほを撫でる風は冷たいながらも心なしか花の薫りを含んで・・・。



ああ、春がもうそこまで来ておるのじゃな、なんと良い心地よ・・・と春の予感のうちに遊んでおった拙者の魂は、

「旦那様、もうすぐ花見じゃねいですかい。桃の節句になりゃ姫様のひな人形も飾られندでしょうなあ。そして右大臣様の徳利には甘酒が入って。畜生、あの甘酒は美味しかったですなあ。でも番小屋を燃やしたのは余計でやしたね。」  
とのご助の言葉で現実に引き戻されたのじゃった。

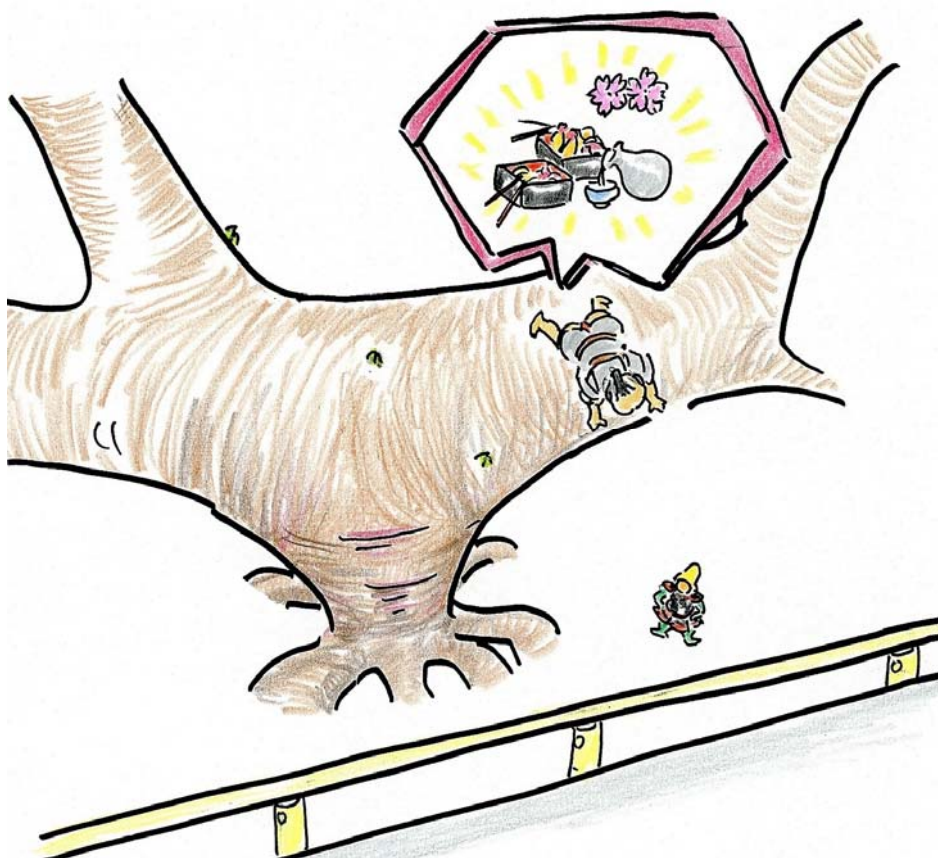
「ぶ、無粋な奴よ。それに何が余計でやしたね、などと、どの口が言うておるのじゃ！」

番小屋を燃やしたのはそちの寝たばこであろうがっ！」と叱りながら声のした方を見れどもご助の姿はなく、はて？と思うておると

「こっち。こっちでさ旦那様。」とはるか頭上からご助の声が。

見上げれば桜の木に登ったご助が小さなつぼみを指さし

「だ、旦那様。桜が咲きそう、いや、咲いてますぜ。」と。



「うん？そちにも春を愛でる心があるのか。善き哉、善き哉。」と誉めてやったのじゃが、ご助の方はと言えば、

「だ、旦那様。これはもう花見でしょ！花見とくりゃあ酒でしょ酒！」と大声でわめくと、

愛車ブルーインパルスにまたがり、いや、三角乗りでお屋敷に向け一目散に駆け出したのじゃ。



「・・・ご助め、性根はやはりぼすけじゃな。」と拙者は呆れながら乾いた向かい風の中はるか彼方を疾駆するご助を追ったのでござる。

やがてお屋敷の番小屋に着きますれば馬小屋（車庫か？）から引き出してきた大八車にゴザやむしろ筵、場所取り用の杭や縄に混じって空徳利や杯、果てはタバ

コ盆などの花見の道具一式がうず高く積まれておりもうした。

「何と手回しの良いことよ。お勤めもこれくらいに励んでくれれば良いものを」

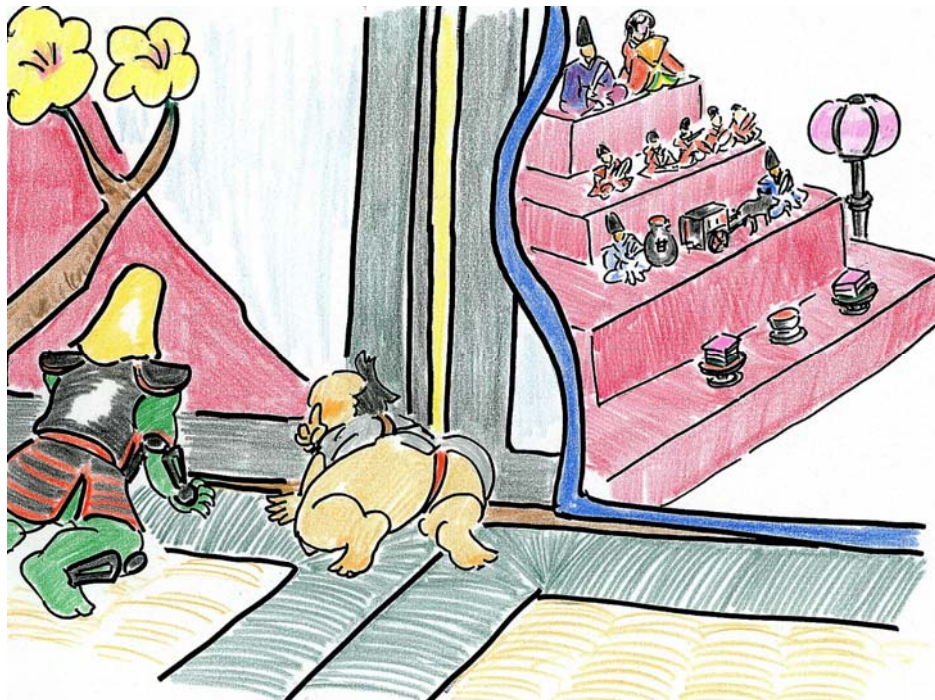
と嘆息しながらご助を探したのでござる。

お屋敷に入り玄関から居間へと入ると座敷の襖の前にかがんでおるご助を見つけたのでござるが、何故かご助は襖の隙間から必死に中を窺っておるのじゃ。

「何が見えるのじゃ？」と拙者が問うと、

「しっ、声が大きゅうござります。」とご助は拙者を叱ると「ご覧くだせえ。」

と場所を譲ったのでござる。



「一体何が見えると申すのじゃ？」と拙者がのぞくと姫様と奥方様がひな人形を飾り終えたところでござった。

奥方様が菱餅と甘酒を注いだ右大臣の徳利を置きながら、

「去年みたいに援が飲まないように……。さあ、これで良いわよ。」と続けたのでござる。

「ありがとママ。でもによ（飲）んだのはぼすけなのよ。」と答える姫様に

「援、また人のせいにしちゃ駄目でしょ。」と奥方様は姫様の頭を撫でると姫様を伴って続き間から台所へと出て行ったのでござる。

「出て行かれましたな。」とご助は拙者に確認すると襖を開け放ち、一目散にひな壇を駆け上がると右大臣様の徳利に手を掛けたのでござる。

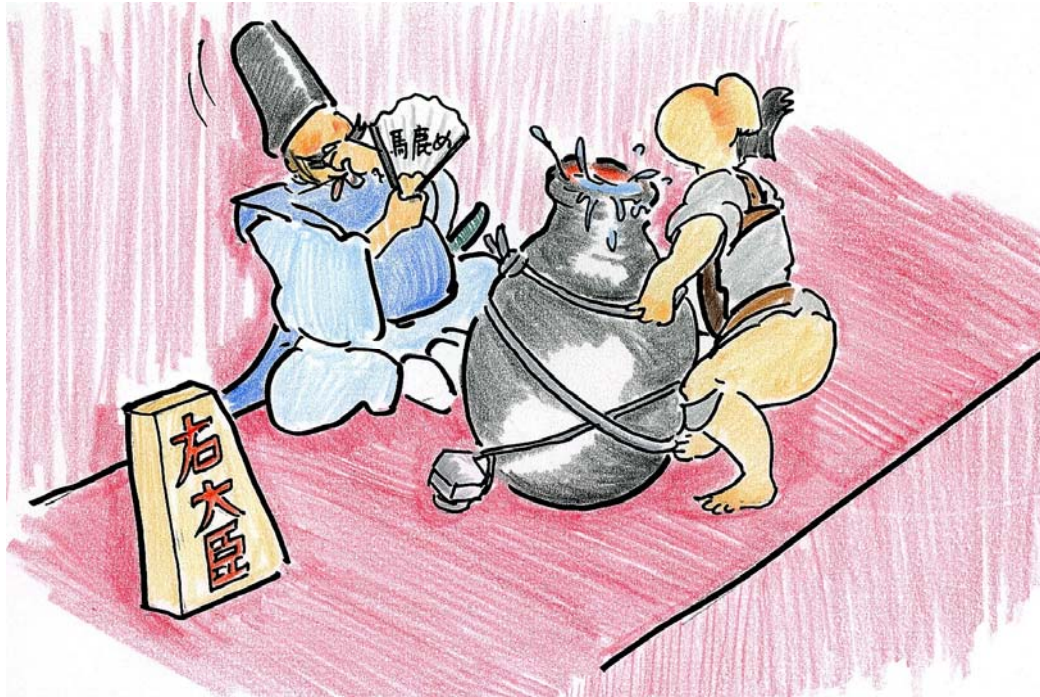
が、徳利はビクともしません。

「な、何とっ？」とご助が驚くのも無理はない、徳利がヒナ段にボルトと針金で固定されておったのじゃ。

「ひっひっひっ、どうじゃもう取れまい。」と扇子越しに段上の右大臣様。

さらに右大臣様が

「奥方様は去年の節句に姫様が甘酒を飲んだと思うておじゃる。それで此度はこのようになされたのでおじゃるよ。」と続けたのでござる。

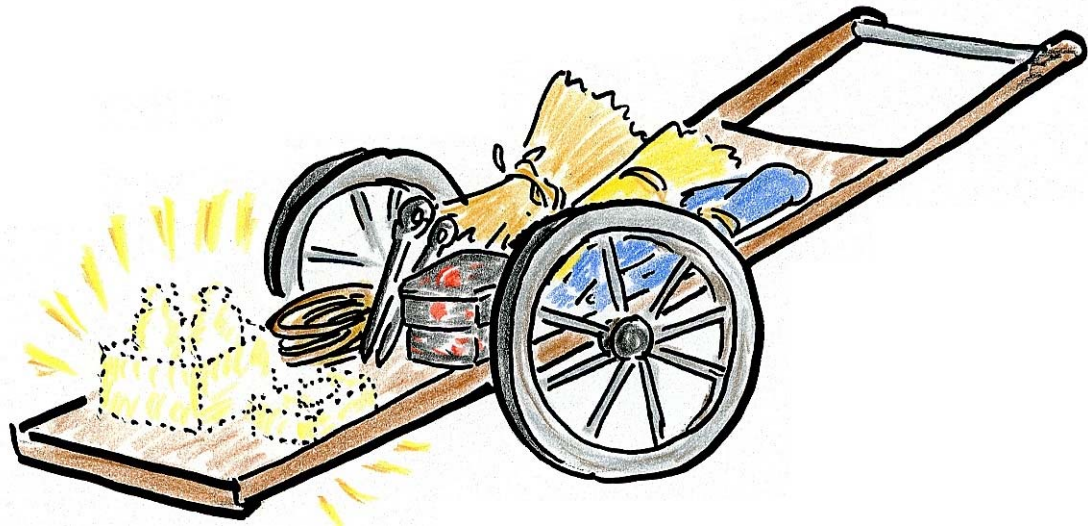


「ご助、残念じゃが諦めるのだな。」と拙者は申したのじゃが

「うううう……。旦那様は下戸だから諦めもつきましようが、酒の無い花見など餡の無いモナカと同じ。眺めておるだけで少しも楽しいことないですぜ。」

と言い放ち座敷から出て行ったのでござる。

「仕方のない奴よのう。右大臣様お許し下され。」と拙者も番小屋へと帰ったのじゃが、ご助の姿が見当たりません。ただ、大八車からタバコ盆と空の徳利だけが無くなっておりもうした。



「まあ、夜には帰ってまいろう。」と余り気にも留めずに拙者は番小屋の戸を開けたのじゃが、その拙者の背を一条の風が・・・。

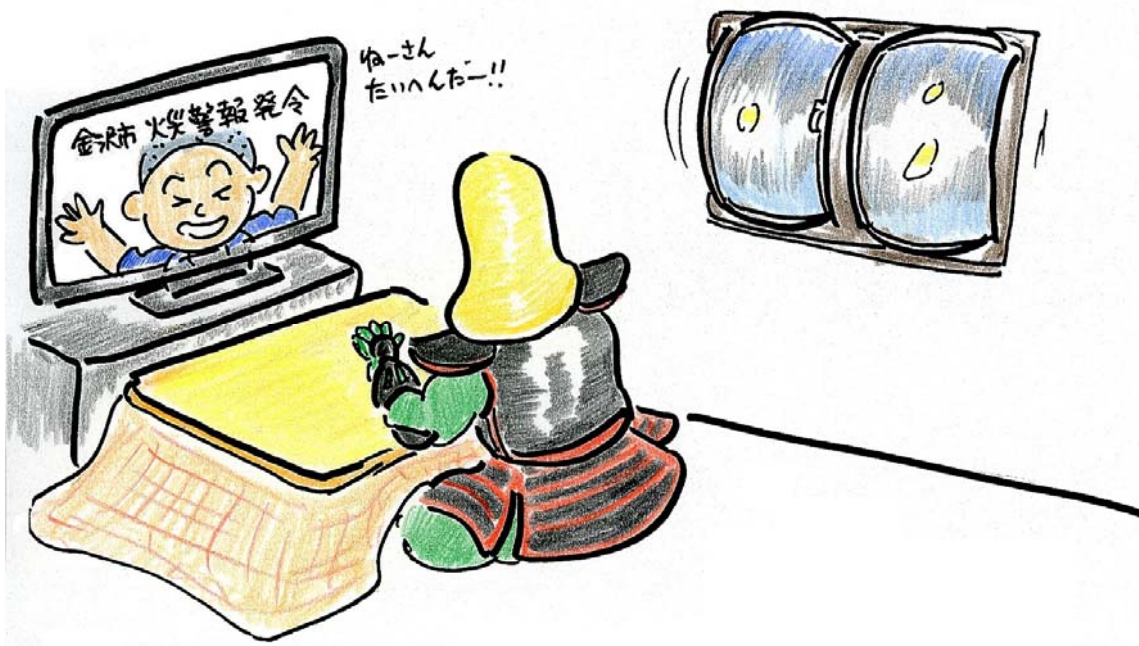
「なんじゃ急に風が強くなって不吉な。確か先日から乾燥注意報も出ておったの。」

と千切れ雲が流れる南の空を仰ぎつぶやいたのじゃった。



しかし夜になってもご助は帰ってこず、昼過ぎから吹き出した南風は更に強くなり『ヒュウウー・・・ビュウウー・・・』と番小屋の窓を不気味に鳴らし続けておった。

拙者はサザエさんを見ておったが、心配で一向にストーリーがわからなかった。カツオが『姉さん大変だ!』と喋ると同時に『ピピッピピッピッ』という音とともに画面には気象情報 金沢市火災警報発令の字幕が。



か、火災警報とな! 確かマニュアルにも載っていたはずとマニュアルを開くと

## ○火災警報

気象の状況が・・・いずれかに該当・・・火災の予防上危険・・・発令する。

- (1) 実効湿度が 60 パーセント以下・・・最大風速が 7 メートルを超え・・・
- (2) 平均風速 10 メートル以上の風が 1 時間以上・・・吹く見込み・・・

「うぬぬう、これは大変じゃ。」と続きを見れば

## ○警報発令中の火の制限

- (1) 山林、原・・・火入れをしない
- (2) …… (略) ……
- (3) 屋外で火遊び又はたき火をしない
- (4) …… (略) ……
- (5) …… (略) ……
- (6) ……たばこの吸い殻・・・火粉を始末する
- (7) …… (略) ……

「ま、まずい。ご助の奴めタバコ盆を持って出ていきおったからの。さ、探さねば。」と、

拙者は番小屋を飛び出し、

「おそらく梅の橋辺りの桜の木の下あたりじゃろう。」と見当をつけると南風が吹き荒れる市内を観音町へと走りだしたのじゃ。



(つづく)